

辨榮聖者畧傳

編者

大ミオヤの無盡の大悲に催はされて、此の土に輝き出で給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下總國鷲の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。家に在りて農事に勵み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀三尊を空中に想見して憧憬の念に堪へず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜斷え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。東京に遊學して山上人に就きて華嚴を修めし央には法界觀の三昧圓かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の曉には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一舉一動全く佛法に相應し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大康上人の意を繼いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家に夜も燈無ければ線香の火を頼りに聖畫を描き、嚴寒にも重ね着せず藁を積んで蒲團となし、超然として勇猛に稱名。建立寄附も一人一厘の結縁として遠近を行脚中若し貧窮者に遇へば

月日重ねて喜捨を積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進を始め給ふ。途を踏むに蟻は勿論若草までも懇ろに之を避け、大康上人の訃音に接しては即座に別行に入つて不臥念佛一百日。更に一切經讀了。明治廿七八年印度に渡りて大聖釋尊の御蹟を巡拜し、歸朝しては東西に巡教し阿彌陀經圖繪を施し給ふこと廿五萬餘部、普く米粒名號を施してかりにも一聲稱名の縁を結び給ふこと實に無數、難化の有縁一人の爲にも數年方便して猶措かず、寺の禮遇を辭り態々下男室に夜を明して勸化の縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては當日供養をうけし下着を脱ぎ與へて如來の大悲を喜びあひ給ふ。日毎夜毎の傳道に疲れし色もなく忙中に僅の閑を得ては如來の尊像教化の御文に筆を運び、汗血のじむ慈悲の雫が幾千枚、その奉謝の金は悉く會堂の創建となり學園の創立となり數萬の文書數十萬の禮拜儀の施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆說法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の縁に隨つては古今の書籍近代科學に至るまで致々として研め給ひ、又畫、歌、音樂、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈應内に滿ちて念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも說法に非れば讀書、讀書に非れば書き物、實に一寸の光陰も爲すこと無くして過し給ふことなく、集る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。一切の時一切の處、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構へし人

も皆恭敬して其の教に額かざるなく、諸宗は勿論耶蘇教の牧師に至るまで發心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光萬民に被る所、念佛三昧各地に盛に行はれ入信の行者幾萬皆悉く值遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ。超えて大正九年吹雪に更くる北越の夜寒身に沁む勸化の旅に老いの御聲に盡きぬ如來の御慈悲を傳へて最後の三昧會を木枯悲しき柏崎に導かれ給ひし十二月四日遷化し給ふ。

仰ぎ惟れば内證甚深く外用亦廣大に、全分度生の無我の力が無作の精進に顯れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如來光明のさながらの反映に在せば、誰か大慈悲の靈應を仰がざらむ。誰か光明の攝化を信ぜざらむ。



無
邊
光

定価 一二〇〇円

昭和四十四年六月二十八日 第一刷発行

著者 辨榮聖者

編者 田中木叉

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二一

郵便番号 一―二

電話東京 03―九四二―一一一(大代表)

振替東京 三九三〇

印刷所 星野精版印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

装幀 栃折久美子

© Mokusha Tanaka, 1969

落丁本・乱丁本はおとりかえます。